

# 博士学位請求論文審査報告

令和5(2023)年10月23日

請求者 賈 海濤 (LD191007)

論文題目 新たな「地域性」の構築—1990年代以降の上海文学におけるノスタルジア・蘇北叙述と文学言語—

審査員 坂 井 洋 史 (特任教授)

三 原 芳 秋 (教 授)

鈴 木 将 久 (東京大学大学院人文社会系研究科教授)

## 1 本論文の構成

本論文は、1990年代以降の中国上海において、「上海」の具える地域的な性格が、政治、社会、文化など様々な分野において関心を集める「価値」として議論の対象となる中で生産された、「上海」を舞台とする文学作品の特徴を、文学言語における地方言語の処理という問題に焦点を据えて実証的に分析し、そこに西欧起源の近代化において構築された原理の一つとしての「地域性」を超克する、動的で柔軟な「新たな地域性」の可能性の一端を窺おうと試みたものである。

論文はA4判232頁(主要参考文献6頁)、約24万字の分量から成り、構成は以下のようなものである。

凡 例

序章 上海文学における新たな「地域性」の構想

第一節 「近代」に翻弄された上海

1.1 上海における「近代」の両面性

1.2 世紀末の「上海ノスタルジア」

第二節 新たな「地域性」とは可能か

2.1 地域文学の研究と「本質としての地域性」

2.2 新たな「地域性」の構想

2.3 方言から見る「地域性」

第三節 論文構成

第一章 「地域性」を再考する「上海ノスタルジア」

はじめに

0.1 「新天地」をめぐる議論

第一節 文化記号をめぐる「辞書」の作成

1.1 「解説」による「辞書」の作成

1.2 文化記号を修復する「辞書」——陳丹燕の「文化散文」

1.3 文化記号を修復する「辞書」——程乃珊の「文化散文」

第二節 「外部」と「内部」の対話

2.1 都市を見る視点の再考

2.2 「外部」に注目する前期作品

2.3 「非—場所」をつくる後期作品

まとめ

第二章 上海文化論的言説としての「蘇北叙述」

はじめに

第一節 想起された集合的記憶

第二節 流動的な職業、そして流動的なアイデンティティ

第三節 「蘇北叙述」における言語的な混種性

まとめ

### 第三章 方言の使用と修正による「叙言分離体」の浮上

はじめに

第一節 『東岸紀事』の版本の変遷

第二節 「解説される方言」における言語的ヒエラルキー

第三節 『東岸紀事』における方言修正

3.1 文学言語に関する修正の施された箇所

3.2 複数の版における方言語彙が保持される箇所

第四節 「叙言分離体」の浮上

4.1 版の修正と「叙言分離体」の確立

4.2 「叙言分離体」を採用した『海上花列伝』

4.3 近代的文体としての「叙言分離体」

まとめ

### 第四章 『繁花』初稿の誕生と方言使用

はじめに

第一節 『繁花』誕生の場である「弄堂網」

第二節 「オールド上海」を振り返る「雑談部分」

第三節 前期段階の模索

第四節 「方言辞書」への疑問視

第五節 「通文性」から「方言の越境」へ

まとめ

終章 新たな「地域性」の可能性へ向けて

主要参考文献

## 2 本論文の概要

本論文は、1990年代以降の「上海文学」(1)上海に定住の経験を持ち、上海語を熟知した作家の作品、(2)上海を舞台にした作品)における「上海ノスタルジア」、「蘇北叙述」と文学言語の分析を通じて、均質化が要請される「近代」という空間的・言語的・制度的構造に抵抗する根拠としての「新たな地域性」の可能性を探ること、特に「新たな地域性」の構築が、「近代文学」という制度的な構造に、どのように新たな可能性を示唆するか考察することを目標とする。従来の「地域文学」研究は、各地域特有の「自然的要素」「人文的要素」等の諸要素が、文学テキストにいかにか表象されているかという問題に注目したが、その場合の地域性とは、他地域との差異に基づき、その地域の文学をはじめ、言語状況や文化民俗などのあらゆる側面に浸透し、その性格を規定すると想定された「本質としての地域性」であり、それを反映した文学は「郷土文学」と称されてきた。本論文は、1990年代以降の上海文学が、「郷土」とは異なる空間＝近代都市の文学でありながら、上海語の書記に際して、従来なかった表記や文体を採用して、方言語彙や構文を文学テキストに組み込むという、文学言語の自覚的な実験を行っており、そこに「本質としての地域性」に基づき生産された郷土文学を超越する可能性が窺うことができると仮説を提示し、これを論証していく。

以下、章の構成を追い、論述の概要を示す。

序章では、問題意識、問題の所在、論述に際しての問題の焦点化などについての懇切な規定を前提する。

第一章では、「上海ノスタルジア」を扱った文学作品を、「農村で都市を包囲する」戦略を採った中国革命の、反都市イデオロギーに遮蔽されていた上海の文化記号を、再び文学テキストに回復させる試みと位置づける。そこから、「上海ノスタルジア」は反都市イデオロギーに対して抵抗するという「反省的なノスタルジア」の側面を

持つことを確認する。また「上海ノスタルジア」と同じコンテキストにありながら、上海における空間移動を取り入れたエピソードを通じて、「外部」と「内部」における場所間のせめぎ合い、内外の格差に伴うアイデンティティや価値観の揺らぎを描いたテキストの分析を通じて、再都市化に直面する上海に「外部」と「内部」という単純な二項対立の図式には収まらない、混種的で流動的な部分があることを示すものであることを指摘している。

第二章では、上海の文化論的言説において排除された「蘇北」（江蘇省北部。上海と隣接し、上海への流動人口の多くがこの地域の出身）を文学のナラティブに取り入れた「蘇北叙述」は、どのように移住者のアイデンティティや集合的記憶、職業像と言語使用を表象しているのかを考察する。

蘇北からの移住者は、近代により再編された新たなアイデンティティも、伝統的な地域共同体への帰属感も持たず、都市の各層と接触しやすい職業に従事することで、同郷コミュニティの共同性を相対化しうる流動的な「個人」として、上海の日常生活に緩やかに溶け込んでいったということが、「蘇北叙述」に属する諸作品において描写されたことを指摘する。さらに、「蘇北叙述」の諸作品は、「解説される方言」と「再現される方言」という、方言書記の方法を通じて、移住者社会としての上海における言語／方言のヴァリエーションを表現する点を特徴としていることを指摘する。そして、上海文学は「上海語」で書かれ、「上海」「上海人」の特性を反映すべき、という「本質としての地域性」観念に基づいた従来の固定観念を、「蘇北叙述」は超越していることを明らかにする。

第三章では、夏商『東岸紀事』を主な事例にし、任曉雯『浮生』、王小鷹『長街行』を参照しながら、「版本批評」の方法論を導入することで、作品の方言使用、表記、語法、規範的言語と方言との融合、叙述文と会話文の配置といった文体的特徴を考察する。テキスト各版本の字句異同の比較から、『東岸紀事』は基本的に、叙述文に規範化された表現を用い、会話文に方言語彙を用いるという、「叙言分離体」の採用を貫徹していることを明らかにした。「叙言分離体」は、近代以降、地域言語の書記、文学言語への取り入れについての対応として広く採用されてきた方法だが、『東岸紀事』などの作品において、叙述文に浸透していった限られた種類の語彙からも、「叙言分離体」の枠組みを逸脱する方言使用の試み、すなわち「方言の越境」という現象が局所的に見られることも指摘する。

第四章では、作家・金宇澄の言語意識と『繁花』の「初稿」を検討対象とする。『繁花』の「初稿」が発表された、上海語で意見交流や情報共有を行うWEBフォーラム「弄堂網」での発言や討論から、作者の投稿の動機や執筆意識、および方言表記に関する観点を窺い、金宇澄の言語意識と『繁花』の方言修正について検討している。具体的には、「初稿」誕生の契機が、都市化に伴う地域の均質化に批判的な視線を投げかけ、オールド上海に関する集団的な記憶を表面化させた雑談であったことを確認し、続く「初稿」の投稿前期で、作者が自らの意図を説明するため、メタフィクショナルな要素を持つ会話シーンを作成し、読者に納得してもらおう姿勢を示していることを確認している。さらに、方言表記をめぐる議論において、作者が漢字の表記を柔軟に変換し、共通語と融合させた混成的な表記を創出する、という方言使用の「通文性」観念を提起したと指摘している。そして、この観念に基づき作られた方言語彙と自由直接話法の使用によって、『繁花』は最終的に「叙言分離体」が前提としていた規範的言語の優位性を相対化する、文体横断的な「方言の越境」に到達したと結論づける。

以上の「上海文学」の検討、分析を通じて抽出された「新たな地域性」とは、本質化されがちな地域文化言説の枠内に潜んでいる保守的で排他的な傾向を対象化しつつ、文学のナラティブによって地域の異質性を可能な限り包摂しようとする、反省的かつ流動的な「地域性」であること、そのような「地域性」とは、安定した構造体として捉えられる観念ではなく、多様な移住者や重層的な文化のつぼにおいて、摩擦や軋轢を伴いながら、様々な文化が互いに浸透し合っているハイブリッドな空間にあって、文学テキストを含め、終始自己更新し続ける文化形式によって表象される特質であるとの仮説を論証している。

### 3 本論文の成果と問題点

本論文の優れた点として、「地域性」を考察するに当たり、従来強調されてきた郷土意識のように、地域の文化現象を支配するものとして先験的に想定される「本質としての地域性」とは異質で、これを批判し、対抗しうる「新たな地域性」の形成およびその可能性を仮説として提示したこと、この仮説の論証を、論文全体を貫くたい

柱に据え、論述が常にこの柱に収斂するよう集中させた点を第一に挙げるべきであろう。これは結論に至るまでの論文の道筋を明確化し、可読性を増す効果をもたらした。「新たな地域性」の生成、発展およびその可能性について、抽象的な理念レベルではなく、方言を使った文学作品を丁寧に読み解きながら、あくまで地域に密着した具体的なケースから思考し、実証しているため、論述は十分な説得力を具えたといえよう。

文学研究としては、「方言の越境」という概念を提起し、方言が音声言語の表記部分にのみ使われてきた「叙言分離」の歴史を踏まえた上で、それを越える方言導入の可能性を理論的、実証的に論じたことも、先駆的、独創的な意義がある。

第四章は、論文全体の構成上、それまでに提示した仮説を、『繁花』という個別のテキストの分析を通じて論証する役割を果たしているが、WEB フォーラムの主催者とコンタクトを取り、過去の討論の様子を窺わせる過去ログを独自に入手し、テキスト生成の過程をある程度まで追跡、再現したことは、未公開資料の発見と、その十分な活用という意味で、学術上価値を有する。テキストがいかにして生成され、成立したかという過程にこそ、問題関心に関わる重要な手がかりが含まれるであろうとの予想から、この資料を探索し、逢着したことは、鋭敏かつ穏当な手続きであった。

論証を理論的に展開する手際にも優れたものがある。「新たな地域性」という概念を構築するに当たって西洋由来の理論をいくつか援用しているが、比較的古典的な議論をほどよく使用するのにとどめ、むしろ個々のテキスト分析や発掘資料をめぐる記述を厚くすることによって、「(西洋の)理論=普遍と(非西洋の)素材=特殊」といった構図に陥ることなくバランスのとれた論述を行っている点は高く評価できる。大きく見ると、前半二章はどちらかといえば、歴史的、理論的背景についての整理と仮説の提示、後半二章が具体的なテキストの分析による仮説の論証という構成で、特に前半で援用される観点や理論などに、旺盛な知的関心に出た、幅広い渉獵の跡が窺われるが、全体を通貫するストーリーラインが不明確にならないように、援用に際して適切な取捨選択を施したと思われ、その慎重な姿勢も評価できる。

とはいえ、上述のように高水準で、一定の完成度を具える本論文にして、問題点が皆無というわけではない。

例えば、文学言語に論考を集中させたため、方言が持つ音声面の役割についての考察が薄くなったこと、地図の表象（これはかつて単刊の論考において興味深い分析を行っていたが、本論文では組み込まれなかった）をはじめとする視覚的な側面など他の領域の営みを考察から排除したこと、言語という媒体、形式のみを論じたため、作者その人に属する問題、小説の内容から考察すべき問題を十分に論じられなかったことなどが挙げられる。例えば、扱われている作品に顕著な点として、主人公として女性が多くクローズアップされていることをふまえ、ジェンダー論的切り口からの分析も有効だったのではないだろうか。作家論、作品論に深入りしないことは、全体の構成、効果的な論証の提示という点から、意識的に選択された構えであると、文中でも標榜されているが、バランスを失しない程度で触れてもよかつただろう。

また理論自体の考察への深入りを禁欲的に避けたためか、かえって問題含みとなった箇所もある。たとえば、マルク・オジェの「非一場所」という概念を（西洋の近代/超近代という）文脈を抜きにして持ち込んだうえで『「非一場所」』としての上海」と短絡して第一章の議論が閉じられていることについては、それが（筆者の意図に反して）「新たな『地域性』」という鍵概念自体をも「無効化するポテンシャル」を孕む諸刃の剣であるという意味において、いささか軽率な援用であったと思われる。

このこととも関連する問題であるが、「上海」の持つ複雑性についての理解、整理が、やや表面的で、十分に深く意識されていないように感じられたことがある。中国の中で上海がいかにかに先端的な西欧性、西欧起源のモダニティに接近していようと、やはり後発型の近代化という烙印は否定できないのであり、そこには、西欧において段階的に継起生成されてきた現象や思想が、発展段階を無視して混在するハイブリッド性が認められるはずである。プレモダン、モダン、ポストモダンの混在する社会状況、思想状況を、著者はいささか単純化しているように思われた。

「ノスタルジア」の政治性について、たとえば同時期の英国における“heritage film”とサッチャー時代の（帝國的）ナショナリズムの復興を結びつける議論があるが、本論では上海の地域性にこだわるあまり、中国全体の政治・社会・イデオロギーをめぐる歴史的な文脈への考察が手薄になったように思われる。背後にある諸問題に、細大漏らさず言及し、深い分析を積み重ねていく論述は、むしろ全体の論旨を見えにくくする恐れもあるが、分析

の前提もしくは背景として、意識し、理解していることを示す程度に、論述において配慮してもよかっただろう。

総じて見るに、全体を一本のストーリーラインにすっきりと整理するための「切り捨て」「絞り込み」が、かなり強行行われていて、それはかなり効果的ではあったが、上掲のいくつかの例も含め、ストーリーの背後や根底の部分にある問題と、当面する現象との響き合いをある程度書き込むことで、論述はよりスケール感を増したように思われた。

このように、いくつかの点で不満を覚えさせる部分も散見されたが、仮説の独創性や、大きな枠組みを骨太に示し得た功績を損なうものではない。上に指摘したような問題が今後の論考で克服され、十分な考察が展開されることを期待したい。そのような今後の研究発展の可能性や方向性について、著者自身もよく自覚していることが、特に論文の前半からよく窺われた。

本論文は、全体として、鋭敏な問題設定、穏当で説得力のある分析、精確な叙述に支えられた、優れた論考になっており、1990年代上海文学の大掴みな描述、また文学言語に関する実証的な考察としても、独創性を具え、学界において他に類を見ないものである。達意の文章で叙述され、間然とするところのほぼない、緻密な論述と穏当な論証で全篇は一貫していて、知的な刺激に富んだ高水準の論文であると評価される。

#### 4 結論

以上の所見に拠り、審査員一同は、本論文が学位授与に値する優れた研究であることを認め、著者に一橋大学博士(学術)の学位を授与するのが適当であるという評価を結論とすることで一致した。

## 最終審査結果の要旨

令和5（2023）年10月23日

審査員 坂井洋史（特任教授）  
三原芳秋  
鈴木将久  
（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

2023年10月18日、賈海涛氏の学位請求論文「新たな「地域性」の構築—1990年代以降の上海文学におけるノスタルジア・蘇北叙述と文学言語—」について、本学学位規則に定めるところの最終試験を実施した。

試験においては、提出論文に関する疑問点および関連分野に関する質疑を行い、説明と回答を求め、併せて外国語能力に関する審査を行ったのに対し、氏は適切な説明を以て応え、また十分な外国語運用能力を有することを示した。審査員一同は、賈海涛氏が学位「博士（学術）」を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。